

心の軌跡

断絶を超える愛と信の対話

藤原久八



心の軌跡

断絶を超える愛と信の対話

藤原久八

文藝春秋



心の軌跡

断絶を超える愛と信の対話

昭和四十六年七月一日第一刷

定価 五〇〇円

著者 藤原久八

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地
電話東京(二六五)一一二一

郵便番号 一〇二

印刷所 凸版印刷

製本所 矢嶋製本

*万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

はじめに

人生道程の中に、いつのまにか、するすると異邦人のようにやってきて、風のように去ってゆく短い青春という時期がある。

青春は、激しい欲望と不安と倦怠、憂鬱、そして深い懊惱、美しいものへの限りないあこがれ、若く青い理性の芽と本能との交錯の世界である。短い季節である。

「汝、自身を知れ」といわれても、自分の心や姿が把握できなくて悲しむ季節であり、明暗の交錯する世界でもあります。一人の人生で、これほど意味深いものがあります。青春は人生の縮図であります。

私は日々、この青春群像の森の中に生活していて、森の姿を忘れてはならない。その森を形成している一人びとりの生命を愛惜して、幸福と生きがいを与えてやらなければならない、そここそ私の生きがいがあるのだからと自らを戒めております。

私は青春の森の一人びとりを知りたい。一人びとりを知るためには、対話があります。

しかし、この青春の森の一人びとりの対話を実践する前に、私は私自身との対話をしなければ

ばなりません。いつも自分に向ってものをいい、自分に対して厳しく、自分の中にある矛盾とたたかい、自分の弱さを徹底的に知り、純粹な孤独の中に生きる人間とならなければなりません。

没我の境地、我執をかなぐり捨てて、自分といつもたたかっておれば、すべての他を恕すおほらかな心になります。また微笑する前の赤子の境地であります。ここに実践する力、対話に対する心構えができあがります。

私の没我の境地、微笑する前の赤子の心境、いつも自分に対して話しかける厳しい孤独さが、青春との対話の私の姿勢であります。

この原点に立っての対話が実践されて、断絶は虹のように消え去り、そこには、碎啄同機、師弟同行の温かな魂の触れ合いの世界が無限に生まれてまいります。

著 者

目次

はしがき

第一対話 母の心の歌

9

第二対話 愛情を育てる人

17

第三対話 親友の青春糞尿譚

23

第四対話 苦患を突き抜けて歓喜に到れ

32

第五対話 父母に対する信頼感の起伏

38

第六対話 若き日の読書と人間形成

46

第七対話 心の目と心のある耳のある竹馬の友

第八対話 母の遺産

第九対話 現代に生きる知人となろう

第十対話 人間疎外の超克

第十一対話 美しいものへの限りないあこがれ

第十二対話 自己流謫の高村光太郎

第十三対話 理性を喚起する母

第十四対話 石坂洋次郎の隠れた心

第十五対話 娘に慟哭して詫びた私

第十六対話	孤独に耐える青春のトランペット	118
第十七対話	教職を三度までも辞めようとした私	128
第十八対話	シシフォス的人間としての青春	136
第十九対話	小犬と少女	143
第二十対話	病苦に耐える青春と泣きわめく青春	149
第二十一対話	教師と生徒	156
第二十二対話	諸君の幸福と私の生き甲斐	164
第二十三対話	松に松風、椎に椎の風	175
第二十四対話	集団に融けこむ美しい倫理	182

第二十五対話 この一球に全力を

191

第二十六対話 健康への祈り

198

第二十七対話 人間の真の誕生日である青春

205

第二十八対話 愛の「杜の家」

216

第二十九対話 自然を美しく見る心

225

第三十対話 銀色の道

233

愛と信の対話と私

あとがきにかえて

245

心の軌跡

——断絶を超える愛と信の対話

装帧
栗屋
充

第一対話 母の心の唄

私は、幼少の頃から、身体がひよわで、よく母の背におんぶして、遠い町のお医者さんに、診察、治療にゆきました。雨の日もありましたし、風の日もありました。

恥ずかしい話なのですが、みなさん、私の母は学問もありませんでしたし、七を才と書くことがいくどもありました。話がおくれましたが、私の母は足軽という低い階級の武士の娘で、その頃は学校もありませんでしたので、母は寺子屋に十日位しか行ったことがないという程度のものでした。そんな教養の母でしたから、私が学校生活をするため、長いこと郷里を離れている折りに、私にくる母の便りには、片仮名と平仮名がまじっていました。でもその便りは、私にとっては、天にもものぼる思いがする程、なつかしく、有難く、よく枕もとにおいて眠りました。

病弱な私を背負って、遠い町の医師に通ってくれた、その長い田舎のでこぼこ道の往復に、ある時は、秋の日向の縁先で、縫物をしながら、いつも母の口から、細く小さく、うたわれる唄は「カチューシャの唄」でした。

さて、みなさん、私はひよわでありましたが、私の母も頑健というには遠い人でした。一筆よぞがきの

朝顔のような女性といったことが、どことなしに当たっていると思われる人でした。からだ全体からうける感じには、そうしたひよわさがありました。顔かたちは、豊頬といたいほどで、口辺にはいつも微笑を浮かべているように見えました。

私の家のすぐそばに、村の鎮守の社があります。その広びろとした境内が、素朴で、野放図な少年たちの遊び場所でありました。

土にまみれた独楽をふところにした道雄、わらそうりをつっかけ、いつも青い鼻水をたらしている三郎、わらじと、ほこりのかかった花林糖の店の一人息子の幸三、他人のとうきび畑で「日の丸ぞめて」と、調子はずれの歌をうたいながら、糞をたれる武三郎と、こうした仲間たちの中の、私の孤独で繊細な感覚のひらめきは、今にして思えば、まちがいもなく、母からの遺産でありました。

野性的風土の中で、夕暮になると、一日の生活を終えた私は、頭のとっぺんから、足のつまさきまで、泥んこでありました。

母は真向きの顔で、迎えてくれました。たしかに微笑しているかと思うが、微笑していないようでもあります。それは頬が豊かであったためでありました。その目は、私に何をいつているかが、はっきりわかりました。私が、母の心を理解していることをわかった母は、何もいいませんでした。「ここにすわりなさい」と、これまで、一度も、母と対決させられたことはありませんでした。

大きな囲炉裏には槽火が、パチパチと燃え、がっちりとした体軀の父と、うつむきかげんに沈黙がちに、温かく、静かに坐している母の面影が、今でも身近に、昨日のこのように偲ばれてなりません。

足輕という武士の家の次女、そして十七歳で、父と結婚した女性、一筆よきがきの朝顔のような女性ではあるが、目に見えないバックボーンがありました。

村の小学校の、秋の学芸会に、私は劇に選ばれました。その他大勢の一人の役なのに、母は三日後に迫った私の晴れの出演にそなえ、かすりのひとえと袴をつくるために、深夜まで夜なべをしてくれたことを、どうして忘れることができましょうか。

二階に眠っていた私は、ふと目をさまし、そろそろと起きだして、母のそばに足をしのばせるように近よりました。

それは優しいまなざしでした。母の口から、細く小さくメロディーが流れていました。

カチューシャ可愛や別れのつらさ

せめて淡雪解けぬ間に

神に願をララかけましょか

カチューシャ可愛や別れのつらさ

つらい別れの涙のひまに

風は野を吹くララ日は暮れる

細いそしてかなしそうな声だったと、私の眠っていた心が、大きくこの唄に感動させられ、目をさ

ましたのは、みなさんの年齢になってからでした。

当時、秋田の師範学校の三年生でした。夏休みで帰郷した私に、母は私の大好物の寿司をつくってくれました。私がたべる手のあげおろしを、じっとみつめて微笑している母でした。

「お母さん、お母さんはずっと私の幼い頃からよく『カチューシャの唄』をうたっていました。お母さんの青春時代に、何か悲しいことがあったのでしょうか。お父さんとの結婚が、どうかしたのでしたか。真実を教えてくださいませんか」と、それまで長い間、私の胸に温めつづけていた水が一杯に溢れて、どっと流れでる谷間の奔流のような、思いつめた私の問いに、母はびっくりした様子でしたが、いつかは私に話したい、そしてその時がきて、自然に水が低い方に向かって流れるような口調で話してくれました。

母にも青春があったのでした。誰にもそれはありません。しかし母の青春は、古い慣習の中で、その花は開花しないで、散ったのでした。母には父ではない、ほんとに心の底から好きな男性がいました。素晴らしい男性でした。「その人」も母が好きでならなかったのですが、不幸にも因習には勝てなかった私の母は、幸福な結婚ができないで、私の父と結婚しました。

「お母さん、その人はいまだどうしていますか」
「子供を三人のこして死にました」

母の生涯の心の唄となった「カチューシャの唄」の、ほんとうの母のメロディーが、私の涙をとめどなくさいました。

私は、志賀直哉の「暗夜行路」の主人公を考えました。それが自分だったらと——。私は父も可哀

そんな人だと、しみじみと思いました。青春の悲しみを超克して、一家の支柱となり、狂気じみたように私を可愛がってくれたその背後に、母の隠れた悲劇があったのかと思うと、どのように母にいたわりの言葉をかけてよいか、その時はわかりませんでした。

「二度と、こんなことを私にきかないでくれるように」と、これが母の言葉でした。

私は、その後、父に対して一層、温かい心で話をしました。父を心からいたわり、母に対し一層、温かい心で話しました。温かい心でいたわりました。

その年の夏休みのうら盆に、私は母と、母の「その人」の墓参りをして、母と一緒に深く墓前に頭をたれました。

母はその後、たえて「カチューシャの唄」をうたうことはありませんでした。

みなさん、私の古い着物など、いろいろと入っているたんすが、私にあります。その中に、私にとって貴重な宝物があります。

それは、母が夜なべを二日も続けて、私のためにつくってくれた、今にして見ると、全くおもちやのように小さなかすりのひとえと袴であります。

私は、いままそばにおき、熱い思いにかられるように、それを胸に抱きしめます。顔を埋めます。

すると、どうでしょう、みなさん。数十年という長い時の流れが、虹のように消えてしまします。そして、ひよわいからだで、一家の調和のタクトをとった母、誰よりも早く起きて、誰よりも遅く寝た母、私が、京大に進むために、郷里を離れる時には、峠をこえた町の駅まで、遠い道をとぼとぼと歩いて、汽車が発つ時まで、まるで、この世の離別でもあるかのように、汽車の窓にしがみついて泣

いていた母、そして「土地がかわるから悪い水をのむなよ」と、何度もくりかえしていた母、それらの一こま一こまが偲ばれるのですが、その中から、母の悲しい、青春のメロディーが、この胸に沁みこんでくるのです。一切の現象が、夢幻と消えて、ただ母のうたう、あの細い小さな哀調の「カチューシャの唄」が、いまでも聞えてきます。

〈人間としての開眼〉

みなさん、今お話ししたように、私が幼少の頃から聞いていた、母の唄に、何か母の青春の悲しみがあるのではないか、「それはなぜか」と疑問をもったことについて、どう思われますか。

柿崎由美子 母でも人間なのだから、母の唄う悲しそうな唄をとおして、母の青春の哀歎を知ろうと思うのは、当然のことと思います。

藤原清子 私たちが、ほんやりしているのに、先生は立ちどまって、静かに母の青春を理解しようとした心はわかりますが、そのまま、そっとしておくことは、できなかったものでしょうか。

高橋優子 悲しい母の心の唄をとおして、母に対したのは、それも校長先生の母に対する愛情の表現として認めたい。

菅原優子 その当時の先生にも、きっと愛する人ができて、その苦しみがわかり、そのため母の苦しみがわかったわけではありませんか。

佐藤和子 先生が一人前になったという証拠と思います。